も其名を傳へたれば、去かよむべき也、すべて集中蟋蟀と書るを、こほろぎと訓ざれば、飼餘りて調べと、のはざるを、こほろぎといふ名の、古今集以後の歌に見えぬをもて、疑ふ人あれど、此集によめる草木などの名の、後世にては絶ていはぬ名もあまたあれば、是のみ疑ふべきにあらず、○略中後世はたおりめの類なる一種の虫を、きり〳〵すといふは、いと後にいひ出し事なるべし、

〔今昔物語十四〕越中國僧海蓮持法花知前世報語第十五

今昔、越中ノ國ニ海蓮ト云フ僧有ケリ、○略中夢ニ菩薩ノ形ナル人來テ、海蓮ニ告テ云ク、○略中汝ヂ前生ニ蟋蟀ノ身ヲ受テ、僧房ノ壁ニ付タリキ、其ノ房ニ僧有テ、法花經ヲ誦ス、蟋蟀壁ニ付テ經ヲ聞ク、○略中功德ニ依テ、蟋蟀ノ身ヲ轉ジテ、人ト生レテ僧ト成テ、法花經ヲ讀誦ス、

〔源氏物語四夕顏〕はしぢかきおまし所なりければ、やり戸をひきあけ給て、もろともにみいだし給ふ、程なき庭に、ざれたるくれ竹、前栽の露は、なをかゝる所も、おなじごときらめきたり、虫のこゑごゑみだりがはしく、かべのなかのきり〳〵すだに、まどをに聞ならひ給へる御みゝに、さしあてたるやうになきみだるゝを、中々さまかへておほさるゝも、御こゝろざしひとつのあさからぬに、よろづのつみゆるさるゝなめりかし、

○按ズルニ、壁中ノ蟋蟀、花鳥餘情ニ毛詩豳風七月篇蟋蟀入我牀下ヲ引ケリ、壁中牀下相近キヲ以テ通ハシ用ヒシニヤ、

〔異本枕草子〕あはれなるもの

十月ばかりにきり〳〵すの聲きゝつけたる、いとあはれなり、

〔桐火桶〕袖のつゆ霜は、夜さむの秋になりそめて、物かなしきに、まくらにちかききり〳〵すのこゑよはり行、○略下